

ルシファーは D.D.D を制服の胸ポケットに入れると疲れたように大きなため息をついた。

しかし「もどいたら声をかける」という自分の言葉を信じ伊吹が起きていたという事実の喜びがその疲労感をほんのりと癒し、伊吹が寝室に来るという期待がルシファーの足を軽やかにした。

寝室に続く廊下に入ると、ちょうどドアの前に伊吹がいるのが見えた。

ルシファーの歩く速度は自然と早くなり、ちょうど伊吹がドアを開けようとした時に伊吹の真後ろに到着していた。

「ただいま」

戯れに後ろから抱きつくと伊吹はビク！つと声もなく身を震わせ真顔で後ろを振り返った。

「・・・もおー！？何するのびつくりするじゃない！！」

自分を驚かしたのがルシファーだと分かった次の瞬間、伊吹は頬をふくらませると自分の感情を表すようにルシファーの胸を軽く叩いた。

ルシファーはそれを軽く笑いながら受け止めると伊吹を抱きしめ軽く唇を重ねた。

「そう怒るな。たまにはこういうのもいいだろう？」

伊吹はすねたように頬を膨らませると顔を横に向けてルシファーに抱きついた。

「おかえり」

「ああ。待っていてくれてありがとう」

そう言いながらルシファーは伊吹と共に寝室に入りドアを閉めると、突然伊吹を抱きしめ伊吹の唇に自分の唇を重ねた。

ルシファーの唇の間から出てきた舌先が伊吹の唇に触れると伊吹の唇は自然と開きルシファーと同じように舌が出てきて、その存在を知らせるようにルシファーの舌先に自身の舌先を触れさせた。

「・・・ん・・・」

ルシファアの舌先が伊吹の舌を軽く舐めるとそれに応じるかのように伊吹の舌がルシファアの舌先を軽く舐めた。

互いの舌先は重なり合いぶつかり合い、交互に上下入れ替わりながら戯れた。

時に絡みつき時に離れるその様子はまるでダンスを踊るようであったが、戯れれば戯れるほど互いを求める感情が増し、ほんのりとした心地よさが伊吹の情欲を誘った。

伊吹はルシファアの腰に手を回すと、ほんのりと沸き上がってきた情欲のままにルシファアの腰を抱きしめた。伊吹の行動に応じるようにルシファアの腕が伊吹の体を再び抱きしめ、後頭部に回された手はまだ口づけを楽しむつもりなのを示すかのように置き直された。

「・・・はあ」

伊吹はあごを引くとうっとりとした小さなため息をつきながらルシファアの胸の中に顔をうずめた。

「伊吹・・・」

ルシファアの手が伊吹の頭を撫でながらそっと伊吹の体を抱き寄せた。

「今日のシャンプーはアスモデウスがよこしたものか？」

「分かる？」

「ああ。バラの香りを好んで使うのはあいつ位しかないからな」

ルシファアは伊吹の髪に鼻と口をうずめると言葉が続けた。

「伊吹のいつも使うシャンプーは花の匂いだ。たまにはバラの香りも良いが・・・俺としてはいつもの花の香りの方が良い」

「なんで？」

ルシファーは伊吹の髪を軽く手でとかしながら返した。

「そっちの方が落ち着くからだ・・・伊吹、ソファーに座れ」

「うん」

伊吹がソファーに座るとルシファーは少し間を開けて隣に座り、伊吹の肩に手を回すと軽く押し、自分の足を枕にして横になるよう促した。

伊吹が促されるままルシファーの太ももに横向きで頭を置くと、ルシファーの手が伊吹の頭を撫で始めた。

「少し寒いな」

ルシファーが暖炉に向かって指を鳴らすと、暖炉に火がついた。

伊吹がぼんやりとルシファーに頭を撫でられている間に寝室は温まり防寒のためのジャケットを着ていると少し汗をかきそうになるほどだった。

「伊吹、俺にとってお前は癒しだ」

「癒し？」

「ああ」

伊吹が仰向けになりながらルシファーの顔を見上げると、ルシファーは愛おし気に伊吹を見つめながら言葉を続けた。

「今日は会合で大分遅くなっちゃったが・・・こうやってお前に触れていると、とても癒されている自分を感ずる」

「私が来るまでルシファーに癒しはなかったの？」

伊吹のその言葉にルシファーは記憶をたどるために少しの間天井を見上げた。

「・・・無かったわけではないが、ここまではつきりと自分が癒されていると感じるのはお前が初めてかもしれない」

「ケルベロスは何の子はルシファーの癒しにならなかったの？」

「・・・ケルベロスか・・・」

ルシファーは再び天井を見上げると自分の記憶をたどった。

そしてふっと鼻で笑うと何かに納得したような顔をしながら伊吹の顔を見た。

「そうだな。言われてみれば確かに今まであいつが俺の癒しになっていたのかもしれない。あいつと散歩がてらに遊んでいるとそれなりにすつきりしたからな」

「そうなんだ。天使時代はどうだったの？」

伊吹がそう言いながらルシファーの腰に抱きつくくと、ルシファーは少し不機嫌そうな顔になった。

「あの頃のこととはもう覚えていない」

「はあい」

伊吹はルシファーの声の調子から天使時代のことは彼の中で黒歴史であることを察すると、わざと可愛らしく返事をしてルシファーの機嫌をごまかし、ルシファー腹部に甘えるように顔をこすりつけた。

(ん?)

伊吹はちょうど自分の胸が当たっている部分に違和感を感じると体を起こし改めて胸を置いた部分を見た。

すると、伊吹の胸が当たっていたのはちょうどルシファーの股間で、違和感の原因は勃起したペニスだった。

「ルシファー、勃っちゃってる」

「お前をこうやって可愛がっているんだ。その位当たり前だろう？」

伊吹はルシファアの言葉を聞いて少し考えると、ルシファアのひざの上に座り首に抱きついた。

「どうした？」

伊吹がルシファアの膝の上に座ると、ルシファアの片手は自然と伊吹の頭に乘せられ撫でるために動かされる。

伊吹は自分の頭を撫でるルシファアの手の感触を少しの間確認すると、ルシファアのおごの下に顔を隠した。

「ルシファア、シたい」

「・・・何がしたいんだ？はつきり言わないと分からないぞ？」

伊吹はルシファアの言葉を聞くと、ルシファアが意地悪でそう言っているのを察し少し気分を害した。

しかし気分を害する反面どことなく、あえてルシファアがそうやって自分に対して意地悪をするのが気持ち良いと感じるようにもなっていた。

伊吹は小さくため息をつくと改めてルシファアの首に抱きついた。

「ルシファアとセックスがしたい」

「分かった」

ルシファアは伊吹の体を抱き上げそのままベッドに運び座らせると制服のジャケットを脱ぎ始めた。

「お前は服を脱がないのか？」

「え・・・？あ、うん」

伊吹は自分の防寒用ジャケットのボタンを手に取るとひとつづつゆっくりと外して行った。

パサ・・・パサ・・・

脱いだ衣服が床に落ち小さな山を作っていく。

衣服の小さな山が高くなるに従い、もうお互いに何回も見ている肉体が姿を現す。

伊吹はパジャマのボトムを下ろした後、ルシファアの体を見上げほればれとした時に吐く小さなため息をつい

た。

全体的にほっそりとしているが、普段から体を鍛えているのがよく分かる厚い胸板と下に伸びる割れた腹部。そしてストラックスを脱げばその上半身とよくバランスがとれた筋肉質な両足が現れた。

「どうした？」

ルシファアの呼びかけに伊吹はハッと我に返ると、パジャマのボトムを手にしたままであることを思い出し慌てて床に落とすと寝ている時の唯一の下着であるショーツに手をかけた。

「下着はそのままでもいい」

その言葉に伊吹が顔を上げると、ちょうどルシファアが自身の下着を脱いでいる所だった。

「お前の下着を取るのは俺の楽しみだ。とっておけ」

そう言いながらルシファアは伊吹の体を柔らかく押し倒すと伊吹の唇に自分の唇を重ねた。

ルシファアの言葉に伊吹は反論をしようと上半身を持ち上げたが、言葉が思い浮かばずそのままほふっと枕に戻った。

「どうしたんだ？反論はないのか？」

ルシファアの目が傲慢をむき出しにしている時の顔になっている。

今その視線に宿る感情は、骨の髄まで自分に逆らうことが出来ないことが分かっている存在に対し、あえて反論を促すことで楽しもうとする支配者の顔だった。

伊吹はルシファアのその表情を見ると負けを認めるように小さなため息をついた。

「何にもない」

伊吹は負けを認めることの心地よさを感じながらルシファアの体に再び抱きつくくと、自然と伸びて来たルシ

フアーの手に身をゆだねた。

次の瞬間あることを思い出すと、伊吹はルシファアの腕の中で顔を上げた。

「ねえルシファア、今も私に癒されているの？」

ルシファアは伊吹のその問いかけにゆっくりと微笑むと、再び愛おし気に伊吹の髪を撫でた。

「ああ。心の底からお前に癒されている」

しかしその言葉を言った次の瞬間、何かに気がついたような顔を見るとふっと自虐気味に鼻で笑った。

「俺もお前無しでは生きられないようになってしまったかもな」

伊吹は一瞬ルシファアのその言葉の意味が理解できなかつたが、意味が理解できると嬉しそうに微笑んで改めてルシファアの体に抱きついた。